

中文小説に見られる指示詞の日訳について

王 湘 榕*

The demonstratives between Chinese novel and its Japanese translations

O Shoyo

abstract

The purpose of this paper is to discover the reason that why Chinese demonstrative zhe and na will be translate to Japanese demonstrative ko and so through comparing the Chinese novel "The True Story of Q" and its Japanese translations.

Keywords: demonstrative, Chinese novel, Japanese translations, marked, unmarked

1. はじめに

日本語の指示詞は「こ・そ・あ」の三体系に分かれているが、中国語では「這」と「那」の二体系に分かれている。この二言語の指示詞の対応関係について、これまでの日中対照研究においては「こ」が「這」にしか対応しない、あるいは「そ」が「那」にしか対応しない用例、つまり単一指示詞の対応に焦点を当ててきた。しかし、実際に複数の訳本を持つ日中対訳作品を参照して比較すると、訳本によって、異なる指示詞に訳されていることもある。

原作：他要求得不是這類東西了。(下線は筆者による)(魯迅、阿Q正傳)

訳本1：彼の求めるものはこの様なものではなかった。(井上紅梅訳、青空文庫)

訳本2：彼の求めているものはそんなものではなかった。(増田渉訳、角川文庫)

上の例で分かるように、訳本1は原作と同じ近称の指示詞に訳されているのに対し、訳本2は原作と異なる指示詞に訳されている。上の例が生じる理由について、これまでの日中対照研究においては「話し手の心理・時間・空間に対する認識の違いより生じたずれ」¹であると解釈されてきた。しかし、話し手(訳者)の指示内容に対する距離感覚がそれぞれ異なるとはいえ、指示詞を使用する際に、やはり何等かの文法的な制約に基づき、指示詞を使用するのではなかろうか。

従って、本稿では、中国語の小説『阿Q正伝』とその複数の日本語訳を通じて、同一原文に対して、異なる指示詞に翻訳されている用例を検討し、異なる指示詞が使用される文法的な理由を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 日本語の指示詞の使い分け

日本語の指示詞「こ」、「そ」の選択要因については、佐久間(1951)では「そ」に「聞き手の領域」という概念が導入されている。その後、日本語の指示詞体系は「融合型」と「対立型」という二つの論点を巡って、様々な角度で論じられてきた。しかし、小説の地の文の場合、「聞き手の領域」の問題はさほど顕著ではない²ため、

キーワード：指示詞、中国語小説、日本語訳本、有標、無標

*平成21年度生 国際日本学専攻

指示詞の使い分けは基本的に「融合型」の観点に準ずると思われる。そして、「融合型」の観点で、「こ」と「そ」の文脈指示の用法は以下のようにまとめることができる。

こ：我々の領域内のもの、または心理的に近いものを指示する。明言され確定されていることを受ける。

そ：我々にとって不明のもの、自分にとって心理的に遠くない、あるいは遠いもの、または前に言ったことを単に指す場合に使用する。確定のやや不十分なことを受ける。

また、指示詞の使用頻度と分布範囲の相違による有標性と無標性について、金水・田窪（1990）は近称のこが明らかに文脈指示では有標であり、何らかの強調的な効果をもたらすと述べている。一方、指示詞の無標性について、松浦（2004）は接近性・領域性に関係なく、現場指示において相当するものがなく、単に前に出てきたものを指すそ系指示詞を「無標先行指示のそ」としている。つまり、日本語のテキストにおいて、「そ」は使用頻度が「こ」より高く、分布範囲が「こ」より広いため、自然に無標となると言える。言い換えれば、「こ」は使用頻度が「そ」より低く、分布範囲も「そ」より狭いため、有標となり、強調的な効果が目立つと考えられる。

2.2 中国語の指示詞の使い分けと日本語の対応

現代中国語の指示詞は主に「這」と「那」の二つの系列に分かれる。従来の研究によれば、この二つの系列は一般的に話し手が時空間に対する認定によって区別されている。話し手に近いものを表す場合に「這」を使用し、話し手にとって遠いものを表す場合に「那」を使用するとされている。つまり、中国語の指示詞体系は、聞き手より話し手の存在が中心で、「融合型」であると言える³。

また、呂叔湘（1980）によると、「這」と「那」で指す内容の意味は殆どの場合にさほど差がないが、「這」が「那」より多く使われている傾向があると言われている。徐丹（1988）の調査によれば、「這」が常用詞（王：使用頻度の高い語彙）の第10位であるが、「那」が第182位であるとしている。

沈家煊（1997）は徐丹（1988）の研究に基づき、否定文の中で「這」と「那」の使用状況を調べた結果、「標記顛倒」という現象が見られると指摘している。つまり、一般的な場合に、「這」の使用頻度は「那」より高く、分布範囲は「那」より広いため無標と結び付きやすい。一方、「那」は有標に結び付きやすい。しかし、否定文の場合に、「這」の使用頻度は「那」より低く、分布範囲は「那」より狭いため有標と結び付きやすい一方、「那」は無標と結び付きやすいと言える。

そして、日本語と中国語の指示詞の対応関係について、王垂新（2004）では「日本語のこ系指示詞は、基本的に中国語の「這」と対応し、そ系指示詞は「這」と「那」の二つに振り分けられる」と述べられている。言い換えれば、中国語の「這」は日本語の「こ」と「そ」に対応するのに対し、中国語の「那」は基本的に日本語の「そ」に対応すると言える⁴。

本稿は、上記の先行研究を踏まえ、中国語の小説『阿Q正伝』とその複数の日本語訳を通じて、このような同一原文に対して、異なる指示詞に翻訳されている用例を検討し、原文とその複数の訳本の間になぜ異なる指示詞が使用されるのか、その理由を明らかにする。

3. 用例検討

今回使用するテキストは中国語小説魯迅著『阿Q正伝』（智慧大学出版）とそれの三つの日本語訳：増田渉訳（角川文庫）（以下日訳Aと略す）、竹内好訳（岩波文庫）（以下日訳Bと略す）、井上紅梅訳（青空文庫）（以下日訳Cと略す）である。紙幅の関係上、ここで取り扱っている指示詞の範囲は、地の文、且つ文脈指示の用法に限定している。なお、ア系指示詞は今回のテキストにおいて、会話文や心話文に見られたが、地の文には見られないため、分析対象から排除した。

原文に出現した「這」系指示詞は158例、「那」系指示詞は23例見られる。以下、原文に出現した指示詞と日訳A、日訳B、日訳Cを照らし合わせ、それぞれの翻訳状況を①「全て「こ」に訳される」、②「全て「そ」に訳される」、③「1例は「こ」に訳されるが、その他は指示詞に訳されていない」、④「1例は「そ」に訳されるが、その他は指示詞に訳されていない」、⑤「「こ」、「そ」の両方に訳される⁵」、⑥「全て指示詞に訳されていない」とい

う六つの場合に分けて、表1にまとめた。

表1 原文の指示詞と日訳A、日訳B、日訳Cの翻訳状況

	①	②	③	④	⑤	⑥	合計
這	98 (62%)	10 (6.3%)	10 (6.3%)	4 (2.5%)	23 (14.6%)	13 (8.3%)	158 (100%)
那	0 (0%)	8 (34.8%)	0 (0%)	4 (17.4%)	2 (8.7%)	9 (39.1%)	23 (100%)

表1から分かるように、「這」系指示詞158例の内、62%は①のようにすべて「こ」に訳されている。このことから、「這」は大半の場合、「こ」に訳されることが明らかになった。しかし、⑤のように「こ」と「そ」の両方に翻訳される用例も14.6%を占めている。

一方、「那」系指示詞23例のうち、34.8%は②のようにすべて「そ」に訳されるのに対し、39.1%は⑥のように「指示詞に訳されていない」。この割合から、「那」はすべて「そ」に対応するとは限らないことが分かる。また、①の0%で示したように、「那」は一般的に「こ」に対応しないことが明らかになった。さらに、⑤から、「那」は「こ」、「そ」の両方に翻訳される(8.7%)場合のみ「こ」に対応することが分かる。

①のような「這」が「こ」のみ、あるいは②のような「那」が「そ」のみに翻訳される用例は今までの先行研究で十分に論じられてきた。一方、⑤のような「這」が「こ」、「そ」、あるいは「那」が「こ」、「そ」の両方に翻訳される用例は今までの日中指示詞の対照研究において、殆ど注目されていない。従って、本稿では⑤のような「這」か「那」は「こ」、「そ」の両方に翻訳される用例が生じる理由について、以下の用例を検討することにより、明らかにする。

ここでは、⑤の用例の数と特徴について説明する。『阿Q正伝』とその複数の日本語訳を通じて、同一原文に対して、異なる指示詞に翻訳されている用例が25例見られた。そのうち、指示内容が明確である用例は22例、そうでない用例は3例見られた。

例(1): 只是有一回, 有一個老頭子頌揚說:「阿Q真能做!」這時阿Q赤著膊, 懶洋洋的瘦伶仃的正在他面前…
日訳A: だがある時のこと、一人の老人が「阿Qは全くよく働く!」とほめた。そのとき阿Qは肌脱ぎのまま、のりくりりとして、痩せっこけた姿でちょうどその老人の前にいたが…

例(2): 他在路上走著要求「求食」, 看見熟識的酒店, 看見熟識的饅頭, 但他都走過了, 不但沒有暫停, 而且並不想要。他要求得不是這類東西了。他要求的是什麼東西, 他自己不知道。

日訳C: 彼は往來を歩きながら「食を求め」なければならぬ。見馴れた酒屋を見て、見馴れた饅頭を見て、ずんずん通り越した。立ちどまりもしなければ欲しいとも思わなかった。彼の求めるものはこの様なものではなかった。彼の求めるものは何だろう。彼自身も知らなかった。

上記の例(1)に見られる「這時」の指示内容は「有一個老頭子頌揚說:「阿Q真能做!」」という事件が起きた時間以外に解釈できないため、「有一個老頭子頌揚說:「阿Q真能做!」」という事件が起きた時間に限定される。本稿は、例(1)のように指示内容が一つの意味にしか解釈できない場合を「指示内容は明確である」と定義し、パターン[I]に分ける。

一方、例(2)に見られる「這類東西」の指示内容の実体は、比喩表現の「類」(様)という形で「酒店、饅頭」と結びつくだけで、その実体をはっきりしていない用例の指示内容は「明確なものではない」と定義し、パターン[II]に分ける。

以下、両パターンに見られる用例を検討する。

3.1 パターン[I]についての用例検討

パターン[I]では原作の指示内容は明確なものである。しかし、各訳本で異なる指示詞に訳されている例文が見られる。

例(3) 只是有一回, 有一個老頭子頌揚說:「阿Q真能做!」這時阿Q赤著膊, 懶洋洋的瘦伶仃的正在他面前
……

日記A：だがある時のこと、一人の老人が「阿Qは全くよく働く！」とほめた。そのとき阿Qは肌脱ぎのまま、のりくりりとして、瘦せっこけた姿でちょうどその老人の前にいたが、

日記B：たった一度、ある老人が「阿Qは働きがいい」とほめたことがあった。そのとき阿Qは、上半身裸で、しょんぼり老人の前に立っていた。

日記C：あるお爺さんが阿Qをもちあげて「お前は何をさせてもソツが無いね」と言った。この時、阿Qは臂を丸出しにして(支那チョッキをじかに一枚着ている)無性臭いみすばらしい風体で、お爺さんの前に立っていた。

例(3)では「這」の指示内容は「有一個老頭子頌揚説：「阿Q真能做！」」である。つまり、「這時」は一人の老人が「阿Qは全くよく働く！」とほめた時以外の時間に解釈できないため、指示内容が明確なものであるパターン[I]に属する。「這」の訳として、日記Aは「そ」、日記Bは「そ」、日記Cは「こ」を使用している。

ここでは、なぜ「這」が「こ」と「そ」の両方に翻訳されるかという理由について検討する。これまでの日中指示詞の対象研究においては、「這」は「こ」と「そ」の両方に対応するとされてきた。つまり、「這」には「こ」と「そ」の要素が両方含まれていると言える。まず、「這」に含まれる「こ」の要素について検討する。

2.2で述べたように、「這」は「話し手が時空間に対して近いと認定する場合」に使用される。一方、「こ」と「そ」は2.1で述べたように、それぞれ「我々の領域内のもの、または心理的に近いものと認定する場合」、「我々にとって不明のもの、自分にとって心理的に遠くない、あるいは遠いものと認定する場合」に使用される。

以上で述べた「這」と「こ」、「そ」の文脈指示の定義を比較すれば、「這」と「こ」の定義は最も近いということが分かる。つまり、この指示詞の定義が近いということが、「這」に含まれる「こ」の要素であると思われる。

次に、「這」に含まれる「そ」の要素について検討する。「這」と「こ」、「そ」それぞれの文脈指示の定義を比較すれば、「這」と「そ」の定義が離れているということが分かる。

一方、「這」と「こ」、「そ」のそれぞれの使用頻度を比較すれば、「這」の数は「こ」より遥かに多いことが分かる。つまり、「這」は無標であるため、使用頻度の少ない「こ」のように強制的な意味がさほど顕著ではないと言える。つまり、使用頻度の高さによる無標性は、「這」に含まれる「ソ」の要素であると思われる。

従って、(3)の「這時」を翻訳する際に、訳者には「このとき」と「そのとき」という二つの選択肢が与えられる理由は、(3)の「這時」には「こ」と「そ」の要素が両方含まれているからであると考えられる。また、王亜新(2004:96)によると、中国語テキストにおいて、「這」は殆どの場合、単なる前に出た文章を指す働きをする点が、日本語の「そ」系指示詞の「文脈承前」⁶という用法に共通するということが指摘されている。つまり、「そ」を使用すれば、「這」に含まれる「文脈承前」という機能と、無標という性質が再現されるのである。一方、「こ」を使用している場合、原文にはさほど顕著ではない「強調」という意味も「こ」系指示詞を使用することにより目立つようになると思われる。

例 (4) 宣統三年九月十四日——即阿Q將搭連賣給趙白眼的這一天——三更四點，有一隻大烏篷船到了趙府上的河埠頭。這船從黑魃魃中蕩來，鄉下人睡得熟，都沒有知道；出去時將近黎明，卻有幾個看見的了。…(中略)…那船便將不安載給了未莊，不到正午，全村的人心就很動搖。

日記A：宣統三年九月十四日——すなわち阿Qがその紙入を趙白眼に売った日である——夜中の十二時半、一艘の大きな黒苦の船が趙邸の川岸に著いた。この船は真暗闇の中を漕いで来たので、土地の人たちはよく寝入っていて、誰も知らなかったが、帰って行ったときはもう夜明けに近かったので、何人かの者がそれを見た。…(中略)…その船はだが大きな不安を未莊にもたらし、正午にならないうちに全部落の人心はひどく動揺した。

日記B：宣統三年九月十四日——すなわち阿Qが巾着を趙白眼に売り渡した日——時刻は真夜中すぎの三更四點、一隻の大型の黒とま船が趙家の船つき場についた。この船が闇にまぎれて漕ぎよせたころは、村民は熟睡中とて、誰も気がつかなかった。しかし出て行くときは明け方に近かったので、目撃者が何人もいた。…(中略)…この船は、一大不安を未莊にもたらした。正午前、すでに全村の人心は動揺した。

日記C：宣統三年九月十四日——すなわち阿Qが搭連を趙白眼に売ってやったその日——真夜中過ぎに一つの大きな黒苦の船が趙屋敷の河添いの埠頭に著いた。この船は黒暗の中に揺られて来た。村人はぐっすり寝

込んでいたので、皆知らなかった。出て行く時は明け方近かったがそれがかえって人目を引いた。…(中略) …この船はとりもなおさず大不安を未荘に運んでくれて、昼にもならぬうちに全村の人心は非常に動揺した。

例(4)では「那」の指示内容は「船」である。「那船」は「一隻大鳥篷船」以外の船に解釈できないため、指示内容が明確なものであるパターン[I]に属する。「那船」の訳として、日訳Aは「その船」、日訳Bは「この船」、日訳Cは「この船」を使用している。

ここでは、なぜ例(4)の「那」が「こ」と「そ」の両方に翻訳されるかという理由について検討する。これまでの日中指示詞の対象研究において、「那」は一般的に「こ」に対応しないとされてきたが、実際の小説には、「那」が「こ」に翻訳される例文も見られる。

「那」は一般的に現在から遥かに離れた時間、場所を指示するとされている。しかし、例(4)の「那」の指示内容は例(4)の二行目の「這船」の指示内容と時間的・空間的にさほど差が見られない。即ち、例(4)の二行目の「這船」の指す時間、空間はそれぞれ「宣統三年九月十四日の深夜」、「趙邸の川岸」であるのに対し、例(4)の三行目の「那船」の指す時間、空間はそれぞれ「宣統三年九月十四日の夜明け」、「趙邸の川岸」である。このことから、例(4)の「那」は重複を避けるために使用される表現であると思われる。

従って、例(4)の「那」の指示内容は一般的に使用される「那」の指示内容と異なり、例(4)の「這」の指示内容と類似していて、「這」の要素も含まれているため、「そ」だけではなく、「こ」にも翻訳されると言える。

しかし、例(4)の「那」が「そ」に翻訳される場合、「那」と「そ」は形式的に対応するが、指示内容を強調する機能は消えると考えられる。なぜなら、日本語の指示詞「そ」は無標であるため、「那」に含まれる有標性が表されていないからである。一方、例(4)の「那」が「こ」に翻訳される場合、「那」に含まれる有標性が有標の「こ」により表される。さらに、「こ」系指示詞に翻訳することにより、「強調」という意味も目立つようになると思われる。

以上、指示内容が明確なものであるパターン[I]について検討した。

パターン[I]の場合、「這」を「こ」、「そ」の両方に対応する理由は、「這」には「こ」と「そ」の要素が両方含まれているからであると考えられる。指示詞の定義を比較すれば、「這」と「こ」の定義が最も近いということが示されている。しかし、使用頻度を比較すれば、「這」の数は「こ」より遥かに多いということが明らかになった。また、「這」は無標であるため、使用頻度の少ない、有標な「こ」のように強調的な意味がさほど顕著ではないと思われる。

「那」にも同じ現象が見られる。しかし、その場合の「那」の指示内容は、一般的に定義される遥かな過去にあるものではない。この場合の「那」の指示内容は、「這」の要素が含まれるものであると思われる。

3.2 パターン[II]についての用例検討

パターン[I]と違って、パターン[II]では指示内容が明確なものではなく、「確定のやや不十分」⁷なものである。この場合も各訳本で異なる指示詞が見られる。指示内容は明確なものではないパターン[II]では、「這」が「こ」、「そ」の両方に翻訳される例が3例見られる。以下、この3例について検討する。

例 (5) 他在路上走著要求「求食」，看見熟識的酒店，看見熟識的饅頭，但他都走過了，不但沒有暫停，而且並不要。他要求得不是這類東西了。他要求的是什麼東西，他自己不知道。

日訳A：彼は路を歩きながら「食べ物を探め」ようとした。見なれた居酒屋を見たとし、見なれた饅頭もみた。しかし彼は通りすぎてしまって、しばらくの間も立ち止まらなかつただけでなく、そんなものを欲しいとも思はずはなかつた。彼の求めているものはそんなものではなかつた。彼の求めるものがどんなものであるのか、彼自身にも分からなかつた。

日訳B：「食さがし」に歩いていると、なじみの酒屋、なじみの饅頭が眼につくが、そのまま通り過ぎる。立ちどまらないし、ほしい気もしない。かれのさがし求めるのは、そんなものではない。それが何かは自分

でもわからないが。

日訳C：彼は往来を歩きながら「食を求め」なければならない。見馴れた酒屋を見て、見馴れた饅頭を見て、ずんずん通り越した。立ちどまりもしなければ欲しいとも思わなかった。彼の求めるものはこの様なものではなかった。彼の求めるものは何だろう。彼自身も知らなかった。

例(5)では「這」の指示内容は「酒店、饅頭（居酒屋、饅頭）」である。しかし、「酒店、饅頭（居酒屋、饅頭）」と指示内容の実体は、比喩表現の「類」（様）で結び付けられることにより、類似性が見られるが、その実体ははっきりしていない。さらに、指示内容は「不是」（ではない）により否定されるため、指示内容の実体はより一層不明確になる。

「這類東西」の訳として、日訳Aと日訳Bは「そんなもの」、日訳Cは「この様なもの」を使用している。日訳Cの「この様なもの」は原文と同じ比喩表現で指示内容を「居酒屋、饅頭」に結び付けられることにより、類似性が見られる。また、日訳Aと日訳Bの「そんなもの」という表現も、指示内容の実体をぼかす効果があると思われる。

ここでは、「這」を「こ」、「そ」の両方に訳せる理由について考える。

例(5)の場合に、中国語原作の指示内容は否定的に述べられているため、「標記顛倒」の影響で「這」は有標となる。従って、否定文において、「這」を「こ」に翻訳する場合、有標性という面は共通すると思われる。さらに、「こ」に含まれる強調という効果も再現されると言える。

一方、「そ」に訳した場合に、否定文における「這」の有標性は表されないが、原作の指示内容が不明確なものであるという特徴は、「ソ」系指示詞に含まれる「確定のやや不十分性」により再現されている。

次の例(6)も同じである。

例 (6) 第四, 是阿Q的籍貫了。倘他姓趙, 那據現在好稱郡望的老例, 可以照《郡名百家姓》上的注解, 說是「隴西天水人也」。但可惜這姓是不甚可靠的, 因此籍貫也就有些不定。

日訳A：第四には、阿Qの出身地である。もし彼の姓が趙であるならば、今日、地方名家と称するものがよくするように、『郡名百家姓』という書き物の注釈に照らしあわせて、「隴西、天水の人なり」ということができる。しかし残念なことにこの姓なるものがあまりアテにならないものであるから、そこで出身地もいささか決めかねる。

日訳B：第四に阿Qの原籍である。もしかれの姓が趙なら、家系を名望家につなげたがる今でもすたれぬ世の習慣にしたがって、『郡名百家姓』の註解どおり「隴西天水の人なり」としてかまわない。残念ながらこの姓があてにならぬので、にわかに原籍を決めかねるのだ。

日訳C：第四は阿Qの原籍だ。もし彼が趙姓であったなら、現在よく用いられる郡望の旧例に拠り、郡名百家姓に書いてある注解通りにすればいい。「隴西天水の人なり」といえば済む。しかし惜しいかな、その姓はなほだ信用が出来ないので、したがって原籍も決定することが出来ない。

例(6)の「這」は「趙」という苗字を指示している。しかし、指示内容である「趙」と指示内容の実体の間は、仮説表現に使われる副詞の「倘」（もし）に結び付けられているため、その実体は明確なものではない。さらに、その指示内容が「趙」である信憑性は「不甚可靠」（当てにならない、信用が出来ない）という否定形でより一層薄くなる。

「這姓」の訳として、日訳Aと日訳Bでは、原作と同じ近称の指示詞「この姓」が使われている。一方、日訳Cでは、中称の指示詞「その姓」が使われている。

例(6)の場合に、原作の指示内容は否定的に述べられているため、「標記顛倒」の影響を受け、指示詞の「這」は有標になる。この場の「這」は「こ」と有標性という面で共通する。さらに、「こ」に含まれる強調という効果も再現されると言われる。

一方、「そ」に訳す場合に、否定文における有標の「這」に含まれる強調的な意味は訳されていない。しかし、指示内容は不明確なものであるという特徴が、「そ」系指示詞に含まれる「確定のやや不十分性」により再現されている。

例(7) 據傳來的消息，知道革命黨雖然進了城，倒還沒有什麼大異樣。知縣大老爺還是原官，不過改稱了什麼，而且舉人老爺也做了什麼——這些名目，未莊人都說不明白。

日訳A：伝えられる消息によって、革命党は城下へ入ったけれども、しかし何も大した変化はないことが分かった。県知事さんはやっぱりもとの人で、役名が何とか改まっただけだし、また挙人旦那も何とか——その名称は、未荘人は誰もハッキリいえなかった。

日訳C：噂に抛れば革命党は城内に入ったが、何も格別変わったことがない。知県様はやっぱり元の位置にいて何か名目が変わっただけだ。挙人老爺は何になったか——これ等の名目は未荘の人には皆わからなかった。

例(7)の「這」は「知縣大老爺還是原官，不過改稱了什麼，而且舉人老爺也做了什麼」（県知事さんはやっぱりもとの人で、役名が何とか改まっただけだし、また挙人旦那も何とか）という内容を指示している。しかし、指示内容である「新しい名称」と指示内容の実体の間は、疑問形の「什麼」（何）に結び付けられているため、その実体は明確なものではないと思われる。さらに、その指示内容が後続する文脈「未莊人都說不明白」（未荘人は誰もハッキリいえない）という否定形でより一層不明確になる。

「這」の訳として、日訳Aでは、中称の指示詞「そ」が使用されている。一方、日訳Cでは、近称の指示詞「こ」が使用されている。（日訳Bでは指示詞が使用されていないため、省略することにする。）

例(7)の場合に、原作の指示内容は否定的に述べられているため、「標記顛倒」の影響を受け、指示詞「這」は有標になる。従って、否定文における「這」は「こ」と有標性という面で共通する。この場合、「こ」に含まれる強調という効果も再現されると思われる。

一方、「そ」に訳す場合に、否定文における有標の「這」に含まれる強調の意味合いが訳されていない。しかし、指示内容は不明確なものであるという特徴は、「そ」系指示詞に含まれる「確定のやや不十分性」により再現されると言える。

4. おわりに

以上、指示詞の指示内容は明確なものであるか否かによって、中国語の小説『阿Q正伝』に見られる指示詞をパターン[Ⅰ]とパターン[Ⅱ]に分け、異なる指示詞に翻訳されている用例を検討した。まず、パターン[Ⅰ]とパターン[Ⅱ]に見られる共通点をまとめる。

中国語の「這」は、日本語の「こ」と形式的に対応するが、有標性という面では、日本語の「こ」と異なる。これはテキストレベルの翻訳において、「這」が「こ」に全部は訳されない理由となる。言い換えれば、テキストレベルの翻訳において、「這」をすべて「こ」に翻訳すれば、「こ」の有標性が失われるため、かえって不自然な文章になる。

しかし、中国語の「這」は形式的に日本語の「そ」から離れるが、無標性という面では、日本語の「そ」と共通している。さらに、「這」と「そ」は「文脈承前」という機能で共通している。この二点は、テキストレベルの翻訳において、「這」がすべて「こ」に訳されず、「そ」にも訳される理由である。

言い換えれば、テキストレベルの翻訳において、「這」が「こ」だけではなく、「そ」にも翻訳されることにより、両言語の指示詞の有標性と無標性が保たれるため、その翻訳文は最も自然なものとなると思われる。

一方、中国語の「那」は、一般的に現在から遥かに離れる時間・空間・心理的事柄を指示するため、「こ」には訳されない。また、今回の収集した用例から、「那」の指示内容は時間・空間・心理的に現在から遥かに離れるものではなく、「這」に置き換えられる場合にのみ「こ」に翻訳されることが明らかになる。つまり、「那」の指示内容には「這」の要素が含まれる場合に、「こ」「そ」の両方に翻訳される。

次に、パターン[Ⅱ]に見られる特徴についてまとめる。

パターン[Ⅱ]の指示内容は、不明確なものであると同時に、否定形で述べられているものである。中国語の指示詞は否定文において「標記顛倒」という現象が起きるため、有標となった「這」は「こ」と有標性の面で共通するようになる。この場合、「こ」に含まれる強調という機能が再現されると言える。

しかし、有標となった「這」は無標の日本語の指示詞「そ」とは有標性が無標性という面で共通しないが、「そ」

系指示詞に含まれる「確定のやや不十分性」は原文の指示内容の意味を表しているため、中国語の指示詞「這」は日本語の指示詞「そ」にも訳されている。

つまり、指示内容が不明確なものである場合に、「這」の指示内容には「そ」の性質が含まれるため、「這」が「こ」「そ」の両方に翻訳される理由となる。

以上の検討から、中国語の指示詞「這」が日本語の指示詞「こ」、「そ」の両方に翻訳されている理由は、「這」には「こ」、「そ」の要素が含まれるからであると思われる。一方、中国語の指示詞「那」が日本語の指示詞「こ」、「そ」の両方に翻訳されている理由は、「那」の指示内容には「這」に置き換える要素が含まれるからである。また、指示詞に含まれる有標性、無標性、及び指示内容の性質も日中指示詞の翻訳に影響をもたらしていると考えられる。

註

- 1 同じ意見は王亜新（2004:97）、胡俊（2006:22）等の論に見られる。
- 2 王亜新（2004:85）
- 3 木村英樹、讀井唯允、王亜新等の論に見られる。
- 4 讀井唯允、張瓊玲の論にも同じ意見が見られる。
- 5 ⑤の場合、三つの訳本のうち、二つの訳本だけに指示詞が使用されていても、その二つの訳本に使用された指示詞が異なるものであれば、分析対象とする。
- 6 「文脈承前」は、三上章（1970）から借りた用語で、一般的に先行文脈に現れた指示対照を照応させる指示詞の用法と理解される。
- 7 三上は（1955）ソ系指示詞について、確定のやや不十分なことも受けるとしている。

参考文献

- 王亜新（2004）「文脈指示における日本語と中国語の指示詞の相違—日文中訳作品の実例分析」『東洋大学紀要、言語と文化』4
- 金水敏・田窪行則（1990）「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展vol.3』講談社サイエンティフィク
- 木村英樹（1992）「中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対象を兼ねて」『日本語と中国語の対照研究論文集（上）』大河内康憲（編）くろしお出版
- 胡俊（2006）「日本語と中国語の指示詞についての対照研究—文脈指示用法の場合—」『鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科地域政策科学研究』2
- 佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法（改訂版）』くろしお出版
- 讀井唯允（1988）「中国語指示代名詞の語用論的再検討」『東京都立大学人文学報』
- 徐丹（1988）「淺談這/那的不對稱[J]」『中国語文』2
- 張瓊玲（1986）「日中両国における指示詞の研究—〈コ・ソ〉系と〈這・那〉系の対照を中心として—」『文献探求』17
- 沈家煊（1997）『不對稱標記論』江西教育出版社
- 松浦恵津子（2004）「会話文における文脈指示のコ・ソ・ア」『マテシス・ユニヴェルサルリス』5-2
- 三上 章（1955）『現代語法新説』刀江書院 くろしお出版
- 三上 章（1970）「コソアド抄」金水敏ほか 編 『指示詞（日本語研究資料集）』ひつじ書房
- 呂叔湘主編（1980）『現代漢語八百詞』商務印書館